

論文 / 著書情報
Article / Book Information

題目(和文)	組織の挑戦的文脈形成プロセスの研究
Title(English)	
著者(和文)	林成光
Author(English)	Shigeaki Hayashi
出典(和文)	学位:博士（学術）, 学位授与機関:東京工業大学, 報告番号:甲第9914号, 授与年月日:2015年3月26日, 学位の種別:課程博士, 審査員:妹尾 大,飯島 淳一,田中 義敏,鈴木 定省,永田 京子
Citation(English)	Degree:, Conferring organization: Tokyo Institute of Technology, Report number:甲第9914号, Conferred date:2015/3/26, Degree Type:Course doctor, Examiner:,,,,,
学位種別(和文)	博士論文
Category(English)	Doctoral Thesis
種別(和文)	審査の要旨
Type(English)	Exam Summary

論文審査の要旨及び審査員

(2000字程度)

報告番号	乙 第 号	学位申請者	林成光	
論文審査員	氏 名	職 名	氏 名	職 名
	主査 妹尾 大	准教授	田中 義敏	教授
	飯島 淳一	教授		
	永田 京子	准教授		
	鈴木 定省	准教授		

本論文は、「組織の挑戦的文脈形成プロセスの研究」と題し、職業的組織に加わる人々の、他者と組織との対人的或いは社会的相互関係によって立ち現われる組織の挑戦的文脈に関する研究であり、以下の7章から構成されている。

第1章「序論」では、背景と問題状況が述べられ、本論文の研究課題が提示されている。現代の社会的状況を、情報技術革命に象徴される技術の変化と、富の分配構造の変化の両面から描写し、このような社会的状況下において、組織に帰属する人々が自信と輝きを失っていること、そして組織運営の導き手であるリーダーもこれまでの組織観や指導理念を拠所にしては新たな展望を切り開くことが困難となっていること、の2点を問題状況として挙げている。これを受けて、本論文では2つの研究課題を提示している。第一の研究課題は、「組織を構成する人々は他者或いは環境とかがかわる中で、如何に組織の挑戦的文脈を形成するか」である。第二の研究課題は、第一の研究課題を一般化した、「組織を構成する人々は他者或いは環境とかがかわる中で、如何に組織の文脈を形成するか」である。

第2章「研究の視座と構成諸概念」では、「現象」または「文脈」などの、本論文で用いられている概念を整理したうえで、社会構成主義的視座と制度論的視座の先行研究をレビューしている。社会構成主義的視座では、本研究が対象とする個人が、個人間の対人的相互作用、言語的な解釈を通じて社会現象を構成していることが示されている。また制度論的視座では、個人と制度（個人が埋め込まれた環境としての制度）との相互のかわり方を捉えることで、研究課題に取り組んでいくことが示されている。以上の2つの基本的視座に加えて、リーダーシップ、経営理念、組織文化、革新組織、権限委譲などの関連する先行研究がレビューされている。

第3章「研究の方法 ～質的研究、グラウンデッド・セオリー・アプローチの可能性～」では、質的研究方法の本研究への適用についての言及がなされている。特に、社会学的領域でしばしば援用される現象学的アプローチを経営学領域に適用する妥当性、さらには本研究テーマに適用する妥当性、そして質的研究の方法論を巡る経営学の系譜の中での本論文の位置づけが確認されている。

第4章「事例分析(1) ～ヒューレット・パッカード社ビジネスコンピュータ部門の挑戦的文脈形成プロセスの分析～」では、対人的、社会的相互作用に注目して、人々の経験、知識、思いが集積されるプロセスが分析されている。ここでは、ヒューレット・パッカード社ビジネスコンピュータ部門における挑戦的文脈形成の現象を記述分析している。制度的規範が組織構成員に付与する自由、緩いマネジメントが許容する抽象的未来観、自らの役割を買って出る境界超越的な多者関係の構成が、組織の挑戦的文脈の形成を促進していたことを明らかにしている。

第5章「事例分析(2) ～DECをめぐるエスノグラフィー分析～」では、Digital Equipment Corporationの事例を通じて、競争的文脈形成のプロセスが記述分析されている。資源分配メカニズムが、自己と他者との境界を公式組織の原理によって結合する多者関係と、勝敗を指向する競争的文脈を形成したことを明らかにしている。

第6章「理論の構築」では、第4章と第5章で検討した二つの事例の記述から得られる個別概念の比較、統合により、組織の挑戦的文脈が如何に形成されるかを説明しうる理論の構築が行われている。また、挑戦文脈に特定しない組織の一般文脈形成プロセスを説明しうる理論への一般化も行われている。

第7章「結論」では、論文全体のアウトラインが示され、主張が整理されている。さらに、本論文の貢献、限界と残された課題、インプリケーションが提示されている。

以上、これを要するに、本論文は、二つの歴史的IT企業の質的データに密着した調査と分析（グラウンデッド・セオリー・アプローチ）を実施することで、組織の挑戦的文脈の形成プロセス、および挑戦に限らない組織の文脈一般の形成プロセスについての理論を構築し、さらには従来の経営学において支配的だった法則定立的な優勝劣敗因果という見方に対して、組織を構成する人々の協働体系が組織の未来を創造しているという新しい見方も確立しており、学術上貢献するところが大きい。よって本論文は、博士（学術）の学位論文として十分価値あるものと認める。